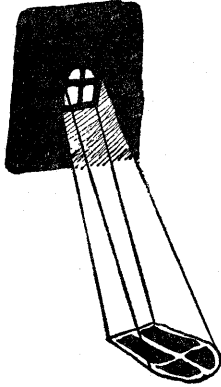


エリクソンと幼児教育 (1)



仁科 弥生

一、はじめに

今日のアメリカの幼児教育を支える理論の一つの柱はジャン・ピアジェの認知発達理論であり、もう一つの柱はエリック・ホーンブルガー・エリクソンの心理社会的発達理論であるといわれている。この心理社会的理論は、フロイトやアンナ・フロイトに学んだヨーロッパの分析医エリクソンがアメリカに移り住んで行なった精力的な児童精神分析の実践と洞察から生まれた理論である。私とエリクソンの最初の出会いは、今から二十数年前にさかのぼる。米国のアイオワ州立大学附属児童研究所で大学院生として学んでいた私は、幼児教育のセミナーで彼の名著『幼児期と社会』を読む機会を得た。彼の独創的な研究についてはすでにそれ以前から、児童の発達を研究する者の間できわめてユニークな理論として注目を引いていたが、一九五〇年に、それまでに公刊された彼の研究論文のいくつかが一冊にまとめられて、彼の最初の書『幼児期と社会』として出版されるに及んで大きな反響を呼んでいたのである。

「基本的信頼感」の獲得こそ人生最初期の発達の課題であると主張するエリクソンの理論は、母親の愛情をただ本能的なもの、

神秘的なものとして漠然ととらえていた私に、母親と乳児の日常
的な触れ合いがどんな意味をもち、どんな作用を果たしているの
かをはじめて教えてくれたといえる。また成人期の発達課題も提
出されており、子どもを産み、育てることが女性の社会参加を阻
害するものではけつしてないという指摘に、私は新しい一つの心
理学的人生観を与えられた思いで、夢中で読んだものであった。
そのときの感動を今も忘れることはできない。三十年近く経過し

た現在でも、彼の理論は、アメリカにおける精神医学や心理学の
領域にとどまらず、幼児教育の分野においてもきわめて有効かつ
具体的な方向を提示する理論として、教育実践の中にも大きな影
響を与えつづけて今に至っている。

わが国でも、いくつかの彼の論文や著書が邦訳されており、彼
の用語である「アイデンティティ」や「モラトリアムの心理」と
いう言葉は人口に膾炙されている。彼の諸概念の有用性はわが国
の精神医学の分野においても認められており、とくに、同一性の
危機を青年期に位置づけたその理論は、現代青年の心理を説明す
るものとして高く評価されている。だが、新しい視点から人間の
幼児期をとらえ直したというエリクソン理論の重要な側面の評価
は、今一つ十分でないように思われる。かといって、幼児教育の
現場に直接かかわっていない私は、その理論を幼児教育との関連

で論じる具体的材料をもちあわせていない。そこで、ここではエ
リクソンの心理社会的発達理論の原点を示す『幼児期と社会』を
中心にして彼の理論を紹介しつつ、彼が幼児期の教育をどのよう
に考えているのか、また今日われわれがかかえている幼児教育の
諸問題の解決のためにどのような示唆を与えてくれるのかなど少
し考えてみたいと思う。

二、漸成論的発達理論

エリクソンは、人間の成長と発達の過程をどのようにとらえて
いるのだろうか。彼は、人間を身体的、精神的、社会的、歴史的
存在というように多面的にとらえ、その統合の主体として自我の
発達を重視している。そして、自我を、経験や活動を環境へ適応
するための行動に統合していく積極的な能力であると位置づけて
いる。さらに自我同一性アイデンティティという彼独特の概念を用いて、変化の
中にありながらも内的連続性という感覚でとらえる人間の心理
的基盤の形成の過程や、人が何らかの心理学的適応をなしとげ、
それによって自己に対する感覚を高めていく過程を漸成論的発達
理論として体系づけたのである。その理論は、生得的なリビドー
の発現によって発達の方向と段階が決まるフロイトの心理学的発

達理論を、社会的、文化的視点を加えてさらに発展させたものもいわれている。なぜなら、フロイトの、リビドーが順次、器官を変えながら発現していくという発達段階説に、エリクソンはパーソナリティの発達が社会の歴史的、文化的基盤や対人関係の中で展開していくという点をも強調して、自我の機能や社会の作用を関連つけたからである。彼の理論が心理社会的発達理論と呼ばれる理由もそこにあるのである。

さて、エリクソンは人間の人生周期全体を問題にし、これに八つの段階を設けて理論を展開している。また、それを明確にするために「漸成的発達の図式」というものを用いている。漸成的発達の原理は一般化すると次のようになる。成長するものはすべて適切な速度と順序によって進む基礎計画をもっており、それぞれの部分は、一つの機能的な統一体を形づくる発生過程の中で、この基礎計画から、段階ごとに特殊な部分として発生し、またその部分はそれぞれの成長がとくに優勢になる時期を経過する。そして各段階は、前段階の上に発達し、さらにその後の段階すべてに何らかの影響を与えつつ統合されていくことを仮定する。たとえば胎児の発達のように、はじめは限られた器官しかもっていないものに諸器官が次々と発現して、一步一步成長していく。この発達の順序については、各器官はそれぞれ発生する時期があり、

この時間的因子はその器官の発生の場所と同じくらいに重要であるとみなされている。そしてその発生を時期を逸したり、その発達の初期において障害をうけると、その器官の発達は完全に抑制されるか、或は永久に歪められるという。またそれは同時に諸器官の機能的な統一全体を危険にさらすことにもなる。一方、正常な発達をすれば、結果として、身体諸器官の間にその大ききや働きからいって適切な関係が生まれるとされている。胎児は誕生の瞬間に、胎内における栄養物や酸素の化学的交換の場から、新生児として社会の訓練体系の中の母親の世話のもとへと移る。そして次第に増大していく彼の能力は、彼の属する文化が規定する可能性や制限に遭遇することになる。その様相は、一連の移動能力や知覚能力、社会的能力などがあらかじめ予定された発達順序に従って発現されていく過程であって、それは成熟していく個体が新しい器官を発達させることによるものではないのである。

すでにおわかりのように、この漸成論に従って、精神分析は、その個人特有の経験や内的葛藤がその人のパーソナリティの形成に及ぼす過程を体系づけたのである。そして健康な子どもは、一連のきわめて個人的な経験の中で、ある程度適切に指導されれば、発達の内的法則に従うという点で信頼できるということをフロイトは明らかにしたのである。それらの内的法則とは、胎児期にお

いては器官を一つずつ形づくり、今や子どもの世話をする周囲の人々と彼が意味のある相互作用を行なうための一連の能力を次々とつくりだす法則である。その相互作用の内容は文化によって大きく異なるとはいえ、その適切な速度と適切な順序とは依然としてあらゆる変異性を支配する決定的要因でありつづけると考えられている。そこには、子ども自身の生きる力をわれわれ大人がもっと真摯に信頼することの必要性が指摘されていると思う。

エリクソンは、このような漸成論的発達原理を用いて、発達モデルを記述している。そのおおよその筋道を述べると、まず、たとえば「取入れ」や「保持」など身体の器官様式が各発達段階特有の様式として発達して、それらがその時期の行動様式を支配する。次いでそれから器官様式が社会の育児様式によって影響を受け、その社会に特有の行動様式へと機能変化していくというものである。またその過程で自我の基礎が発達すると考えられている。そしてその理論は発達課題と心理社会的危機という構成概念に基づいている。すなわち、これは、大人の神経症的葛藤の内容は、すべての子どもが幼児期に経験しなければならない葛藤とそれほど異なっていないことや、すべての大人は、パーソナリティの奥深くにこれらの葛藤をもちつづけているというフロイトの発見をもとにして、各発達段階に特有な心理的葛藤とはどんなものであるかを明らかにしようとしている。そして人間にとって、心理的に生きつづけるということは、ちょうどその身体的な衰えという脅威に対して休みなく戦わなければならないのと同じように、これらの葛藤を休みなく解決することであると考え、それら葛藤の克服を、それぞれの段階ごとに人が学習し、或は達成しなければならぬ発達課題であるとみなし、またそれらを「危機」と呼んで、人間の全生涯にわたって問題にしている。

それらの課題は、運動機能、知的能力、社会的能力、情緒的機能などの発達を基礎にして、人が環境を支配する力を増すにつれて達成されるものである。各段階におとずれる危機とは、人が社会の要請に自分を適応させることを迫られて経験する個人の内欲求と社会の要請との間の葛藤状態に他ならないのであるが、人はそれ以前に達成した発達の技能を駆使して、その危機を乗り越えなければならない。そしてそれを果たしたとき、次の段階へスムーズに進むことができるかと仮定している。また、このような経験を支配するその人独自の方法こそがその人の自我の統合機能なのである。したがって、各段階における発達課題と、その段階の心理社会的危機との間には相互関係があり、さらに各段階の危機の克服は、次の段階への準備となり、自我の強さとなる。つまり各段階は最初期から相互に関連をもっているという考えが示されて

漸成の図式

VIII MATURITY								EGO INTEGRITY VS. DESPAIR
VII ADULTHOOD							GENE-RATIVITY VS. STAGNATION	
VI YOUNG ADULTHOOD						INTIMACY VS. ISOLATION		
V PUBERTY AND ADOLESCENCE				IDENTITY VS. ROLE CONFUSION				
IV LATENCY				INDUSTRY VS. INFERIORITY				
III LOCOMOTOR-GENITAL			INITIATIVE VS. GUILT					
II MUSCULAR-ANAL		AUTONOMY VS. SHAME, DOUBT						
I ORAL SENSORY	BASIC TRUST VS. MISTRUST							
	1	2	3	4	5	6	7	8

VIII 円熟期							自我の統合 絶望
VII 成年期						生殖性 停滞	
VI 若い成年期						親密さ 対 孤独	
V 思春期と 青年期					同一性 対 役割混乱		
IV 潜在期				勤勉 対 劣等感			
III 移動性器期			自発性 対 罪悪感				
II 筋肉肛門期		自律 対 恥と疑惑					
I 口唇感覚期	基本的信頼 対 不信						

いる。たとえば、乳児期の発達課題として母親との信頼関係の確立があげられているが、子どもがその後の人生において、人と暖かい人間関係を結ぶことができるかどうかは、ある程度この初期の信頼関係が確立されていたかどうかにかかっているというわけである。また、子どもは自分自身と両親の絆に確信をもつことによって、次の段階の課題である自律の獲得へと勇気づけられて進むことができるのである。その危機は「信頼対不信」、「自律対恥」と疑惑」というように対立的に示されているが、不信や恥という否定的な要素は、誰もが各段階での危機に直面し、それを解決しようとするときに経験するものであり、これをある程度経験することが強い自我の成長には欠かせないと考えられている。勿論、この場合、何が課題となるかは、それぞれの社会によって異なり、その解決のされ方も違うということが指摘されている。そこには、エリクソンの比較文化的手法による研究から生まれた洞察が反映されている。

漸成的図式の読み方についても少し説明してみよう。まず、図式は時間的な推移に伴う各部の分化の発展を定式化したもので、対角線部分に課題や危機が示されている。空白の部分は、発達の速さ、逸脱などに関して個人差の余地があることを示している。すなわち、各段階で、一つの核心的な葛藤が克服されて、新

しい自我の特質、つまり人間の積重ねられた強さの新しい規準が付加されるにしたがって、心理社会的発達は進んでいくのである。対角線の下空白部分はこれら葛藤の解決の一つ一つの前兆をなすものための余地であり、それらはすべて発達の発端から始まっていることを示している。たとえば自律の下の空白は、自律性のそれ以前の現われ方がどのようなか考察する余地である。対角線の上の空白は、たとえば自律性のその後の現われ方を示すというふうに、これら発達の過程で生じる派生的特質をはじめとして、成熟したパーソナリティにみられるさまざまな変形を明示するための余地である。この図式には、パーソナリティの発達に、単にリビドーの発現と充足のあり方によると考えるフロイトの心理学的発達理論の次元に、歴史的・社会的制約をはらむ現実の中でその発達が展開していくという心理社会的発達の次元を重ねたエリクソンの立場が明確に示されている。

このように、乳幼児期には乳幼児期にふさわしい発達課題があるのである。したがって、そのような課題にそって乳幼児期の教育のあり方が問われなければならないことはいうまでもないことであろう。

次回は、その発達段階の詳細をたどってみよう。

参考文献

- 1 Erikson, E.H., *Childhood and Society*. New York: W. W. Norton, 1963, 1st ed., 1950. (仁科弥生訳『幼児期と社会』みすず書房一九七〇)
- 2 Erikson, E.H., "Identity and the Life Cycle: Selected Papers," *Psychol. Issues* (Monogr.), Vol. 1, No. 1, 1959. New York: International Universities Press. (小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房一九七三)
- 3 Erikson, E. H., *Insight and Responsibility*. New York: W. W. Norton, 1964. (鏑幹八郎訳『洞察と責任』誠信書房一九七一)
- 4 Evans, R.I. 『エリクソンとの対話』岡堂、中園訳 北星社一九七一
- 5 藤永保編『児童心理学』有斐閣 一九七三
- 6 Lorenz, K. 『文明化した人間の八つの大罪』日高、大羽訳 思索社一九七三
- 7 Newman, B.M., & Newman, P.R., 『生涯発達心理学』福富伊藤訳 川島書店一九八〇
- 8 Piaget, J., 『知能の心理学』波多野ほか訳 みすず書房一九六〇
- 9 Rutter, M., *Maternal Deprivation*, Harmondsworth, Penguin Books Ltd., 1972.
- 10 Schaffer, H.R. & P.E. Emerson, "The development of social attachments in infancy," *Monographs of the Society for Research in Child Development*, Vol. 29, No. 94, 1964
- 11 Spitz, R., 『母子関係の成り立ち』古賀訳 同文書院一九六七

(津田塾大学)

